

変人と合コンと傷アリ、
偶に人形

シアンコイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

笑いあり、涙あり、感動あり、なんて事はなく。

ただただダラッとドルフロの世界でオリ主が癖のある人達と絡むお話。

目次

| | |
|--------------|----|
| 日記と合コンと傷アリと | 1 |
| 変人と傷アリと人形と | 19 |
| 夢と指輪と | 29 |
| おっさんと任務と | 38 |
| 異名と森と奥の手 | 49 |
| トラウマと義手とただいま | 62 |
| 日常と嫉妬と知り合い | 76 |

日記と合コンと傷アリと

○月○日

記憶の混乱が起きているから日記を着けると主治医に言われてしまった。

混乱と言うより前世の夢を見て思わずペルシカに、「あれ、俺に女の友達居たっけ」と口走ったのが原因である。

そもそも寝ぼけた男の世迷言なのだからそんな問題視した雇い主のペルシカが悪いと俺は思う。

とりあえず、夢から覚めても頭から離れない内容をこの日記に書いてみようと思う。

変態国家日本がもう存在しないとか嘘だと言ってよバーニイ……

昔の資料や、映像を調べているとガンダニューム合金なる言葉と、白い悪魔に赤い流星が見れたから多分バーニイも存在していたはず。

うん、きっとそうなんだ。

だからきつと銃を持って戦う女の子のアンドロイドが居るのも我らが変態国家が最後に残した遺産なんだと、俺は思い込むようにした。

だって発想からしてやり得るの日本とお隣国でしよ、戦艦の女の子のゲームが一大ブームだったからやりかねないで……。もしハンバーガーが好きな国だったらまた違った趣向だろうね知ってる。

安定しない労働時間のせいで体内時計の精度はゴミクズなんで、今日も夜更けにこれを書いているが隣の部屋でガサゴソと音がする辺りまだペルシカは仕事中的なだろう。暫くは忙しくもなる筈もないので、ノンビリと就寝したいのだがそうもいかない、案外気を抜いていたりすると思ってもよらぬ事が起きたりするもんだ。

例えば（ここから途切れている）

そう、例えば急な電話で古い友人から合コンに誘われたりしてしまったり。

毎回毎回、あの人も懲りないと思うが、女性の一人身は辛いだろうなと思えなくもない。年齢も俺より三つか二つ違つたはずで、今でも変わらずキツチリと真面目な委員長タイプな彼女はお堅い性格と、一般男性が無視できない程大手の企業で重役に居る事から敬遠されやすいのだろう。

さっきの電話も、偶々友人に食事会に誘われて人数合わせに人が欲しいから来て欲しいと取り繕っていたくらいだ。

いやもうバレバレですよ、って言いそうになったがもうなんかいらしく感じて来て了承してしまった。

察しのいい人間ならその条件だけで合コンだと分かる、もうなりふり構っていられない程に焦ってるんだろうか。

正直彼女は、街を歩けばクールビューティで男などホイホイできそうなものだが、近寄りが見たい雰囲気があるのも否定できない。

もう何度聞いたか、ペルシカが薄ら笑みを浮かべて常敗無勝の女と俺に言う事から、彼女の敗戦の数は相当なものだと推測できる。

だが突き詰めればそこまで恋人欲するという事は、つまり純粋な乙女心から恋がしたいのだろうか………………………。

何書いてるんだろ、俺。

さっさと寝るのじゃーと、瞼と擦って俺を寝かせようと引つ付けてきたナガン婆ちゃんには逆らえないので今日はこれくらいにしよう。

本当なら寝る前に腕の調子を整えておきたかったが、天辺越えて朝焼けまで見えそうなので諦めて婆ちゃんに付き合おう。

明日はどうなるだろうな。

2062年、過去に起きた第三次世界大戦により世界の主要国家のすべてが衰退し。行政を行うほどの力を失った国家は国内の都市運営でさえ不可能となり、首都及び産業地域などの重要な都市のみを直轄管理する事とし。

それ以外の都市は入札から権利を獲得したPMC、民間軍事会社に都市運営を委託するとした。

現在でもその状態は変わらずに世界は循環している。

以前にもとある遺跡から発見された物質により、世界的大災害が起き、広範囲がその物質に汚染され人間が生きて居られる場所が狭まり。

国家の保身から第三次世界大戦が勃発、核弾頭の応酬で汚染された大地がより広がり活動可能地域、および人類の数が減った。

大雑把に言ってしまうえば大体自業自得である。

そんな世界で、自律人形と言う見た目は普通の人間と変わらない外見を持つ人形が人

手不足を補う為に生産され、あらゆる場所で働いている。

レストランから採掘場に至るまで、多くの場所で活躍できるほどのAIを備えている。

それほどまでに高度なAIがあれば、当然それは力として運用される。

労働に特化した人形があるのならば、戦闘に特化した人形も当然生み出されそれは戦術人形と呼ばれた。

それらを生み出した二つの企業、I・O・P・社、鉄血工造株式会社
後に自律人形のトップシェアを占める事となるI・O・P・社

軍需産業を祖業とし、独自に戦術人形を生み出した鉄血工造株式会社

二つの企業により、自律人形は世界に広まるも最後には鉄血工造株式会社を襲撃した、テロリストを排除する為に作動した防衛システムが何らかのエラーを起こし、人類に対し攻撃を開始。

戦争を目的に作られた戦術人形に対抗すべく、日夜、PMC、G&KはI・O・P・社の戦術人形を用いて戦っている。

そして、先ほどまで日記を綴っていたこの男、スクラッチは頬に引つ掻き傷の様な五つの特徴的な傷を持つ、それ以外は見た目平凡に見える男性である。

I. O. P. 社にて「16 Lab」の主任研究員ペルシカリアにお抱えの警備員として雇われているこの男は、周囲の研究員から訝しげな存在として見られていた。

当然のように存在するI. O. P. 社の警備員とは別に雇われ、経歴を聞いてものりくらりとごまかし、必要以上にペルシカ以外とは話そうとしない不思議な男。

毎日毎日、仕事に没頭する研究員たちを勞い、色々と雑用をこなしているM1895 戦術人形と戯れるか、旧式のノートパソコンを弄りペルシカの愚痴や世話を焼くだけの存在。

因みにM1895は、スクラッチと同じくもしもの時に動けるように調整され「16 Lab」に配置されてる。

居る意味はあるのだろうか、そんな疑問を持たない研究員が居るも誰も口にしない。何故なら主任のペルシカを唯一宥める事が出来る数少ない人間であるからだ。

しかし今日に限って、スクラッチは姿を消していた。何でも知り合いに呼ばれたらしく、前日にペルシカから休んで良いと言われたから出かけたとか。

何時もなら穏やかな笑みを浮かべて「お茶がおいしいのじゃ」とのほほんとしているM1895も、こればっかりはどうしようもなかった。

「仕事休みって言ったけどさ……、偶にはのんびりお話してくれてもいいじゃない……。

なんでいつつもいてほしい時に……この前も私の事忘れて……」

目に見えて拗ねているペルシカをどうしたもんかとM1895が唸り頭を抱え、周りの研究員は溜息を吐く事しか出来ずにいた。

「お仕事は何をされてるんですか？」

「G&Kで上級代行官をしています」

あつ、無理ですね（任務失敗） 合コン開幕早々に無自覚でATフィールド全開にした女が俺の斜め前に座る電話の主です。

自己紹介を素直にするのは良いんだけど、今の時代PMCだつて言葉だけでも偉そうな地位に居るつて素直に言います普通!?

男なんて大体、守りたくなる可愛い子とか、おしとやかで優しい子とか、綺麗で知的な頼れるお姉さまが良いという人もいる。けれど俺の隣に並ぶ男どもの顔を一度見てみたのかな!?

誰も彼もが自己顕示欲が高そうな身なりで余裕を見せたがつてる様子だったから、ヘリアンさんみたいにクールビューティな女性に興味津々だったろうに。

吹き出しそうになった飲み物を無理矢理呑み込んで斜め前を見てみれば平然として

いる、この場を凍らせた戦犯ヘリアンが涼しい顔でグラスを傾けていた。

ヘリアンさんエエエ……………

やっぱりペルシカは正しかったようだ、アイツに「ヘリアンは合コン敗北者じゃけえ」とか言われてもこりや言い返せんわ。……アイツも中々に婚期を逃してる気がしないでもないんだがな……………。

ヘリアンさん、それ掴みの部分で「私」、実は従軍していたんですよー（キャピ）「みたいな事言うギャルと変わらんから。」

いやそんなギャル居るわけないけど例えとして間違つてないと思う、気づいてないのだからうけどもう男性陣は引き気味だ。

「あー、それってどんな仕事なんですか？ 事務とか？」

お、意外と食いついた男が居たようだ。でもあんさん、アンタの頬、若干引き攣ってますけど。

「詳しくは話せませんが、部下の監督と情報伝達ですかね。」

もう少し、オブラートに包もう?? いや、今のご時世でオブラートがあるのか甚だ疑問であるけれども……………。

そんなんもう自分が重役ですとでも言ってるのと変わりませんから、それこそ明るく笑って「わたしー、偉いんですよー」とか言うなら可愛げもあるし男も食いつくだろう

けど。

「……………？　どうかしましたか？」

崩れる事の無い鉄仮面、宛ら雪の女王！！

こりや誰も攻略しようなんて思わんわ……。どつかのギャルゲ主人公とかラツキースケベでもおきん限り……。いやヘリアンさんにそれやったら鉛弾で頭吹き飛ばされそう。

「スクラツチも、どうして固まっているんだ？」

「あ、俺には敬語使わないのね。」

「長い付き合いなだから当然だろう？」

「だから呼ばれたんだもん……。。」

ややご不満なご様子でそう言い切ったヘリアン女史、てか合コンに数合わせとはいえ男を連れて来たっていう時点で彼女の友達に勘違いされそうだし…。

このまま自分が連れて来たとか言わないよな、流石に……。

「ああ、二人はご友人で？　偶然ですね。」

「いいえ、偶然ではなく。人が足りないという話だったので私が呼びました」

フラグ回収ハイイナー、もう何も驚かねえぞ……。ほらまた男子組の顔が固まっているんですが…。

「ヘリアーン、やっぱりそういう関係なの〜?」

今の今まで静かにしていた女子組の一人がニンマリと笑みを浮かべて、当然の質問を投げ掛けてくる。うん、当然だ、合コンに女子が男を呼ぶとか普通ありえんからな……。

まあ、のこのこ着いて来て今頃気が付いた俺も中々間抜けだと思う。一応否定しておかないとヘリアーンさんにボーイフレンドの夢がまた遠のいてしまう。

「いや——そういう、が何を指しているのか分からないけど、腕は確かで心強い男ではある。」

ああもう、俺は知らん。斜め前では黄色い悲鳴が聞こえるし、隣では何か視線感じるし、俺はもう何も言わねえ。

ヤケ酒してやる、俺は褒め慣れてないんだよ!!

常敗無勝の名は伊達じゃなかった……(憐れみ)

二次会まで持ち込んだ先では、見事に彼女の友人だけがもれなくお持ち帰りされ、残った俺とヘリアンさんともう一人あぶれた男が居たが、意気消沈した彼女が俺に悪酔いで絡んでいた故に潔く去って行った。

よく空気の読める男だ、飲みでも固まった男子組の中でいち早く立ち直って場を盛り上げていたし、飲み物とか、会話のネタと気が利いていた。

なんとなくわかる、ああいう男が「良い人だけ友達止まり」の人なんだろう。去りに際に笑顔でお任せしますね、なんて爽やかな顔で消えて行った。

少なくとも俺の肩で柄にもなく赤い顔で酔いつぶれているヘリアンさんより、勝機は有り余っていたろうに。

俺はもう、彼女の発言で論外だったらしい、正直もう結婚とか考えられるような経歴でも無いし気もないのだから。

「すくらつちい……あつい……」

「ハイハイ、暑いのはヘリアンさんが飲み過ぎたからでしょー」

「のまずにいられるかあ……これで……ヒック、……にやんかいめだと……」

「……………今年で、13回「ペルシカかあ!?!」ペルシカだなあ!?!」お、おう……」

ダル絡みを仕掛けてくる残念系美女を担いで歩けばチラホラと深夜の住民達に目を向けられる、どうせ安直な勘ぐりで下衆な考えでもしているのだろう。

ただでさえ視線が集中する中で身じろぎして呂律の回らない口で、火照ったと騒ぐ彼女を宥めていれば口を滑らせ、何時もより二割増しのテンションで掴みかかられる始末。

「……チツ」

時間は深夜、当然良からぬことを考える奴ら等このご時世ごまんといる。悪い予感と程良く当たるのは本当に腹立たしい。

自然と舌打ちをしてしまった手前、目の前のヘリアンはバツの悪そうな顔をして手を放した。

「す、すまない。痛かったか……？」

「違う、そうじゃない」

酒酔いで顔が赤くなるのは当然、暗がりの外灯と、平然としている普段とは真逆の泣きそうな顔されると反応に困るだろう。

周囲には誰もいない、不自然なくらいに誰も。

気が付けば周囲に人はおらず、浮浪者もいなければ段ボールもない、綺麗な街並みだ。本当に。

人気を避けたのが悪手だったみたいだ。

出来るだけで自然にまっすぐと投げ出した腕、皮手袋に隠した手を前ならえをする手

の様に伸ばす。唯一親指だけをピンと立てて手首がガシヤリと金属音を上げる。

さあ、準備は整った――

「そ、そうじゃ、のうペルシカ。」

「……………んー？」

「お主とスクラツチは随分仲が良いのう、どんな関係なのじゃ？」

「……………どんな？　どんな……………、お馬鹿な友達、かなあ…。でもどうして？」

「あやつ、わしと話をしても身の上話は絶対にせんのだ。ペルシカなら何か知っておるのじゃろ？　教えてくれんか？」

「……………うーん、本人の居ない所で話すのも良くないけど、アイツへの仕返しって事で良いよ。」

「(ちよつと動機が理不尽なのじゃ……………)」

「まずアイツの秘密、ナガンもアイツが何時も皮手袋をしてるのは知ってるでしょ？」
「そういえば長袖のコートに必ず皮手袋じゃのう、やっぱり理由があったのか。」
「アイツの左手は、私が創ったの」

「ヘリアンさん、心当たりは？」

「ない……とは言い切れないな。国家があつた時代でさえ反乱軍が居たくらいだ、民間軍事会社を良く思わない人間も勿論いるだろう」

「そう思うのなら今度からG&Kの名前は出すなよ、ちよつと不用心だと思わないの!？」
「今までは隠していた!! でもこの前読んだ本には素直な女性が人気だつて……」

「その結果がコレだよ、次からはダメだからな!？」 俺が居なかつたらアンタ今頃ヤバかつたんだぞ!？」

「くつころつて奴か!？」

「酔っ払いだったの忘れてたよこの残念美人!!」

真夜中の街並みを引き裂く様に響く炸裂音を背にスクラッチはただ只管、走り抜ける。

隣で赤い顔のまま緊張感のない会話を繰り返り広げるヘリアンに、彼は呆れ半分、付き合った後悔半分の気持ちで背後から迫る複数人の男をどうするか考えた。

男たちの正体は十中八九、G & KそしてPMC関係に恨みがあるテロリストだろう。あんな大つびらにG & Kの関係者なんて言ったヘリアンに非があるが乗り掛かった船。スクラッチもそう安々と友人をテロリストに渡すつもりなどなかった。

彼の左腕は過去の出来事から欠損し、ペルシリカにより自動人形の技術を流用した義手として装着されている。

簡易装甲として前腕に頭から胸までを隠せるほどのシールド、手から前腕、手首を固定、一体化させる事により指先から弾丸を撃ち出す自動小銃として扱う事が出来る。

それによりある程度の危険ならば退ける程の力はあるものの、数の不利が大きすぎた。一人ならともかく彼の傍には酔っ払いの女性。

護るにも限界がある、ついで息が切れ始めた頃になって今さら思い出したのか左手親指をコッキングするように手前に引き、手の中で何かが切り替わる音を聞き、スクラッチは背後を見ず口を開いた。

「ヘリアン、絶対に振り返るなよ!? 絶対だぞ!」

「絶対を二回繰り返すのは振りだとカリンに聞いたのだが!」

「お馬鹿!! 走つてろ!!」

タイムリングを計るように大股になったスクラッチは踏み出した右足を起点に身体をよじり、迫る集団に向けまるで銃器を扱うような仕草で左手を右手で支える、集団が反応したその瞬間にはその指先から鈍色の弾丸ではなく黒い弾が吐き出される。

視認できるほどに遅いその弾道はやがて集団の手前に着弾すると一瞬眩い光を発した。

「——さっさと帰るぞ!!」

即座に振り返り逃げ出した事でその光から免れたスクラッチは、数日前に「気まぐれで作った」と眠そうな顔で自分に閃光発音筒の弾丸バージョンを渡したペルシカに感謝する。

どんなからくりか分かりはしなかったが、着弾式で持ち運びも楽となれば十分使える代物。何故戦術人形に使わせないのか聞いて見た所

『そもそもその威力じゃ、人間に効果はあつても戦術人形には効果ないの……。鉄血なんて尚更、だから気まぐれなの』

との理由、それを聞いた時は自分にも使い道が少ないんじゃないかと内心でボヤいた

がここで役に立った。

明日はペルシカの話し相手にでもなろうと、そんな呑気な事を考えて息を大きく吸い込んだ。

○月×日

長い一日だった、ヘリアンさんの合コンに付き合つてテロリストに狙われて、黒い海の中をランニングするぐらいには長かった。

あの後、近場の違法駐車車を拝借して無事にヘリアンを返す事が出来たので上々だろう。

クルーガーのおっさんには少し時間の融通位してくれと文句を言つて、逃走に使つた車の弁償とかは全部押し付けてきた。大事な部下を守つたんだから当然だろう。しかしあのオヤジ性懲りも無く「もう一度働く気はないか」なんてのたまつたので、アンタの顔見るより毎日ペルシカの面倒見た方がマシだと言いつ返してやった。

因みに意味合いとしては研究以外へなちよこを毎日相手していた方がアンタの顔見
るより良いという意味だ。……………あれ、これそのまんまだな……………まあいいか。

夜遅くに帰宅して故、研究室は一人を除いてもぬけの空だったのが、ペルシカとナガン
婆ちゃんがソファ寄り添って寝ているという珍しい場面を見れた。

空調は効いていたがペルシカに風邪を引かれれば、マスクに冷えピタで仕事をしかね
ないので毛布を掛けておいた。……………まったく、自分の事には疎い奴だよ。

日記はあくまで医者に言われただけ、形だけだ。だからあと数日くらい書いてやめる
つもりでいる。

毎日毎日、素直な気持ちを綴るつても面倒だ。

今日は久々に銃として左手を使つたからメンテナンスもしなきゃいけない。試しに
手首を360度回転させてみると一瞬だけ動きがブレる。

一度オーバーホールしなきゃいけないみたいだ。

シールドに使つた装甲も取り換えが必要なようだし、明日にでもペルシカの相手をし
て交換をお願いしよう。

流石に疲れた、今日はもうこれで終わりだ。

変人と傷アリと人形と

取り外した腕を目の前に、手首のジョイント部分を一瞥し破損が無いか、何処に異常があるのか確認してみるも素人目には分からないのか首を傾げたスクラッチは手を止める。

汚れを落として中の弾倉を確認、昨日使った分を補充して特殊弾の替えを入れ、シールドとなる装甲部を取り外し剥き身になった義手を見つめる。

壁に掛けられた時計を一瞥すると立ち上がり、自室を出た彼はこの時代では高級品なコーヒーを淹れ始める。毎日毎日カフェイン中毒とも思える程に飲み続ける友人を思つての事だった。

「……………ふあ……」

背後で小さな欠伸を聞くと彼女愛用のマグカップを軽く水洗いし、コーヒーを注ぐ。流石に二人分は持ち運べない、それなりの時間を寝ただろうに隈は消えず獣耳をピコピコさせ臉を擦るペルシカリア。

どんな原理でその髪なのだから耳なのか分からない物体を動かすのか、それはスクラッチの永遠の疑問であった。

「ほれ、ペルシカリア」

穏やかな口調でマグカップを差し出したスクラッチ、彼の言葉にゆつくりと反応した彼女は首をそちらに向けマグカップを両手で受け取ろうとして固まる。

「…あ、あれ、腕、は？」

「不調だから外した、悪いけど時間が空いたらメンテナンス頼む。………何も無いよ、そんな顔すんな」

途切れ途切れの言葉と、目に見えて動揺した様子にスクラッチは理由が分かったのか薄く笑みを浮かべて困ったようにそう告げる。

「寝ぼけてるなあ、ほらコーヒー飲んで」

「……うん」

「ナガン婆ちゃんも朝だぞー、起きろー」

「うう……、眠いんじゃない……年寄りを労われ……」

「年寄りには朝早いんだぞ婆ちゃん」

矛盾してるんじゃない、と恨めしそうに呟いて帽子を被った金髪幼女を横目に周囲を見渡し、時計をもう一度確認するとペルシカに対し口を開いた。

「今日は他の人が来ないな、何かあったのかな？」

疑問を口にしたながらも自分の携帯を胸元から取り出し、ウェブニュースを流し見してみるもそれらしき情報は流れてこなかった。

ならばと未だ機能しているSNSへと進めようとした指はペルシカの言葉で止められた。

「今日は休みにしたから……」

「はっ!？」

唐突な友人からの休み宣言にスクラッチは思わず声を上げ、洗面台向かって歩き出したナガンはつんのめり、当のペルシカは不満そうな瞳で彼を睨みつける。

彼の驚きは至極真つ当な疑問からだった、彼女個人に雇われている自分は一概に彼女の一言で休日など簡単に手に入るが、彼女はあくまでもI. O. P. 社『I61ab』の主任研究員でそこまでの権限があるのかという疑問だ。

彼女の表情と周りの状況を加味するに権限があるらしい、しかしそれにしても研究と人形が恋人、とでも公言しているような彼女が休日を作ったというのが驚きでもあったのだ。

「……………もういい、腕持ってきて、直すから」

私怒っています、そんな言葉が聞こえそうな仏頂面でペルシカは手を差し出した

ペルシカが使っているデスクは散らかっている、それはもうキーボードの周りには長い髪の毛が落ちていたり、乱雑に置かれた書類の束、ふとした時に口にしたビスケットの欠片を見るに明らかだった。

恐らく一週間以上は掃除をしていないだろう。とりあえず義手のメンテナンスを頼み、視界の端の作業机で真剣に俺の腕を弄繰り回しているペルシカを見るとやはり天才なんだと思う。

普段はすぼらでへなちよこ研究員の影は何処にもない。

「そういうえば、この前ペルシカがくれた特殊弾ありがとうな」

昨日の一件を義手を見て思い出したので、思った事をそのまま口にした。さつさと伝えておかないと忘れてしまうかもしれないからな。

するとどうしたか、よれよれ白衣の背中がピクリと動いて彼女の手が止まる。

「……なんで急に？」

「昨日なあ、実はヘリアンに呼ばれて合コンに参加してただけど」

「え、なにそれ面白そう。結果は聞くまでも無いけど」

ピコツと後姿でも分かるくらいに大きく動いたケモ耳に苦笑し、彼女の容赦の無い言葉に息が漏れた。

「まあ、結果はご存知の通りの結末でさ。悪酔いしたヘリアンさんを担いで帰路についてた時に変なの絡まれた」

「だから腕の調子が悪かったのね、納得したわ。」

書類を纏める音とカチャリカチャリと部品が組み合わさる音が部屋の中で小さく響く。普段ならキーボードと話声、無数の排気ファンで充満する部屋が今は程よく静かだ。何となく居心地がよかった。

「それと、ヘリアンの合コン失敗14回目を惜しまないと。パチパチパチパチ」

「本人にソレ聞かれたら大変な事になるぞ……」

「どうせ直接会う事もないもの、平気よ」

意地の悪い笑みを浮かべて振り返ったベルシカの手には俺の義手が握られており、嫌が直ったのかそのまま俺の前まで来て徐にワイシャツを脱がし始める。

「きゅ、急に脱がすなよ!!」 自分でやるから!!」

「もう裸を見てるんだから恥ずかしがること無いでしょ？ 初心ね」

平然と発した言葉と余裕な表情のペルシカ、何だか負けた気分にもなるのだがこの状況では勝ち目がない。というより今日はもうペルシカの機嫌を損ねたくない。

顔が熱いが従うとしよう。

「……………ホレ」

「はいはい、シールドの方の装甲は今ちよつとないからそのまままでお願い」

「ありがとう、ペルシカリア。助かるよ、本当に」

左肩の断面に接合された機械の窪みに義手の球関節にあたる部分を差し込んでくれる、接続が完了すると思った通りに手が動く事を確認し感謝の意を伝える。

前腕部分のシールドにあたる外骨格が無いのは心許無いが、それでもこうして休日時間を使ってくれたことを感謝せずにはいられないだろう。

「う、うん……………急に……………それは、卑怯……………」

「ん？ 何か言った？」

「……………いいえ、何も。どう、変な所ある？」

「大丈夫、流星は天才科学者ペルシカだよ」

「褒めてもコーヒーしか出ないわよ」

「知ってる、ついでにそのまま風呂入ってきな」

「……………え？」

穏やかな言葉のやり取りをしていると、ラボのドアが開きナガン婆ちゃんがラフな格好で姿を見せたので目の前で疑問の声を上げた天才にニツコリと笑いかけてやる。

「もう何日も風呂呂に入っていないだろ？ そろそろ入ってくると良い」

「……………なんで分かるの？」

「髪の毛ゴワゴワしてるし、服もよれよれ。ずっと見てたんだ触らなくても見たら分かるよ。人形が好きでも最低限生活はしないと、婆ちゃん、お願い」

「全く、人使いがあらいのう。スクラッチ」

「婆ちゃんしか頼れないんだ、よろしく」

やれやれ仕方ない、なんて機嫌が良さそうな顔で啞然としているペルシカの白衣を引つ張ってラボを後にした婆ちゃんに感謝しつつ。

自室から持ってきていたノートパソコンを開き、届いていたメールに返事を返す。へりアンさんからも来ているな、後にしよう……………。

さて、二人が戻ってきたら何をしようか。古い映画なんか良いかもしれない。

『ペルシカ、何をニヤニヤしているんじや?』

『別に、何でも無いよ』

『どう考えてもあつたとしか思えないんじやが……、スクラッチは何を言ったんじや?』

『んー………ヒミツ』

『秘密だらけな奴らでわしは頭がパンクしそうじや……』

『ずっと見てる、か………ふふふ』

『流すぞー』

「この映画、ゾンビ映画なのにだいぶコメディね」

「マイナーな映画だけど面白いから俺は好きだよ」

「ほう、ゾンビの真似をしたら襲われんのか……。E. L. I. Dにも通用するのかな？」

「無理」

「残念じゃ……」

「音楽に合わせてゾンビ叩くとか、案外余裕あるんじゃない？」

「慌てる時って変な行動取る事あるし、俺は好きだよ、このシーン」

「あの太っちゃよは何をしたいのか分からんのじゃ」

「そういうキャラ、必ず居るわよね」

「そうしないとゾンビ物は慎重なだけの主人公で話が進まないから仕方ないね」

「最後の最後で軍が出てくるのね……」

「まあ、ゾンビ物は最後は脱出か全滅か、が大体だから俺はこの終わり方好きだよ」

「頑張れば全員生き残れそうだったのう」

「それで最後は元の生活にって、ある意味凄いわね」

「ダブル主人公だと思ったらこの終わり方とは……、何とも奇妙な話じゃ」

「頭空っぽにして見れて面白いから好きだよ、俺は」

「それじゃ次は——」

「ゾンビ以外（じゃ）」

「アツハイ」

夢と指輪と

『彼女を護衛するのが俺達の仕事だ』

強面の屈強なおっさんが俺と仲間たちに向けそう告げる。各々がその後ろを見やれば視線も向けずに携帯端末を触り続けている女性が映る。

見覚えのある癖のある髪色にケモ耳の様な何かを着けた女性、軍の護衛が必要なほどに緊迫した場所で平然としている辺り肝の座り方が違った。

いや、この場合。アイツは恐らく気にしていないのだろう。

昔つからこんな奴だった。

仲間たちが小声で言葉を交わし、目の前のおっさんは話を早々に切り上げると彼女を乗せて装甲車が走り出した。ハンドガンにアサルトライフル、グレネードにマガジン、それなりに重装備だ。

揺れる車内で微塵も視線を上げずタブレットを見つめる対面の女性に思わずため息が漏れ、マスクとヘルメットを外すと俺はソイツの名前を呼んだ。

『コーヒーが無いとそんなにご機嫌斜めか？ ペルシカ』

『……………え……………』

間抜けた顔で自分の名前を聞いた瞬間に顔を上げた女性、ペルシカリアに自然と笑みが漏れ、同時に車両が大きく揺れる。

死の直前でも、走馬灯を見るわけでもなくスローモーションになる光景に自然と答えが生まれた

……………ああ、夢か、コレは……………。

目を開ければ黒い天井、淡く光る照明が部屋のドアから差し込みソコから流れ込んでくる冷気に眉が動く。

ナガンかペルシカか、どちらかが部屋に入って来たらしいが半開きのまま出て行ったのだろう辺りを見渡しても誰もいない。

上体を起こせば身体からずり落ちる毛布、ソファに雑魚寝していた自分は何も掛けて

いなかっただのを覚えている。なるほど、ナガン婆ちゃんがまた世話を焼いてくれたみたいだ。

懐かしい夢の反面、左腕が疼く。体温を発しない左手を開いては閉じ冷たい拳を包む様に右手で掴みあつていると小さな溜息がもれた。

時間は午後2時、一般人ならとつくに起きている時間だ、如何せんこの仕事を始めてから以前の仕事の反動かかなりぐうたらになった自覚はある。

重い身体を動かして立ち上がり欠伸をかきながら半開きのドアを閉め、照明を点けデスクのパソコンに触る。

「げっ……」

クルーガーのおっさんからまたメール来てる、何の用だよ。この前ハッキリ断つただろうに。

そのまま削除したい所だが恩人には変わりないので仕方なく開いてみれば、ヘリアンさんの件での感謝の言葉と案外重要な案件だった。

フリーとして雇われるのなら吝かでもない、しかし今は雇い主がいる番犬のような状態だ。自分では判断が出来ない、とりあえず返信し案件に關してはおっさん側からペルシカに話を持って行ってもらわなければ俺にはどうしようもなかった。

まあ、ソレが成功すればペルシカにも利益がある。俺ももしかしたら知り合いに会え

るかもしれない。悪い要件ではなかった。

一息ついて立ち上がり長袖のジャケットに着替え部屋から顔を出す、チラホラとこちらに視線を向ける研究員たちを尻目に、椅子の上で体育座りしているペルシカに視線を向けると向こうも照らし合わせたように視線が重なる。

首を傾げながら小さな笑みを浮かべた彼女の元に向かい、口を開く。様子からみても今日の機嫌は良いようだ。

「おはよう、よく眠れたみたいね」

「おはよう、お陰様で、……さつきクルーガーのおっさんからメールが来てね、ペルシカに直接話をしてくれるように頼んだからその内連絡が来ると思う」

「ふーん、何の用？」

「詳しい話は何も、おっさんから聞いてくれるか」

「わかった」

「お、スクラッチ。起きたのか、おはよう」

背中越しに聞こえた陽気な声に呼ばれ、振り返ると書類の束を両手で抱えるナガン婆ちゃんが見上げている。ニッコリと朝日の様な笑顔に心が洗われるような気持になる。

「おはよう婆ちゃん。今日は忙しそうだな」

「まったくじゃ、皆少しは年寄りを労わってほしいもんじゃ」

「婆ちゃんが頼りになるから仕方ないよ」

自分を老兵だの年寄りだと言うけれど、見た目に比例して褒められると笑顔を隠さずに頑張る姿は子供だと思う。

そこが婆ちゃんの良い所なのだが。

顔を綻ばせながら書類運びに戻った婆ちゃんを見送り、もう一度振り返るといつの間にか作業を再開していたペルシカが映る。

仕事の邪魔をするわけにもいかなかったので自室に戻ろうかと思った矢先に、俺の目には予想外のものが飛び込んできた。

「……………んー？」

「ぺ、ペルシカ……………？」

柄にもなく頭の中が音が立てて揺れ、声が震える。

「ん？ どうしたのスクラッチ」

「そ、その手の、物は…!？」

「手？ 誓約指輪だけど」

「——ツ……………」

「??? スクラッチ? どうしたの?」

「ん、固まってどうしたのじゃ? おい、おい……………わわ!!」

「え、なに、どうしたの……」

「こやつ………気絶しておる」

「………へ………？」

「………指揮官の中には誓約指輪を渡して、人形の所有権をグリフィンから指揮官に移し、性能リミッターを解除する役割があるの」

「な、なるほど。その点検をしていたのか」

気が付けばソファにリポップしていた自分が起き上がった先で見たのは仏頂面のペルシカだった。

椅子の上で不機嫌そうにコーヒーを啜りながら睨む瞳は何時もよりも圧が強く、何も言わずに俺に座れと指で指示してきた。

「そう、目の前のお馬鹿さんは何を早とちりしたのか、誓約指輪って言葉で卒倒して間抜けな顔を見せてくれたけど」

棘だらけの言葉が俺を突き刺すもソコはグツと堪える、何も友達が指輪を持っているだけで気絶したなんて失礼にも程があるだろう……

「ああ……まあ、ごめんよ。ペルシカが指輪を持つてるってだけで驚いちやって……」

「……………自分が凄く失礼な事を言ってる自覚ある？」

「……………すみませんでした」

「まあ、面白い物が見れたから許してあげる。それに——」

「ん？」

「私が指輪を持っていただけで気絶するほど驚いてくれるって、色々と、面白いから」

素直に頭を下げて謝罪すると、あっさりとして許してくれたペルシカはいつもの表情に戻ると俺を見ていた瞳が徐々に細まり。口角が上がる。

意地の悪い笑みが浮かび俺を見つめてくる、言葉にしてご満悦、何がそんなに面白いのか、俺にはさっぱり分からん、まったく何も、分からん

「そうかい……」

何も言葉が浮かんでこない、ニマニマとこちらを見つめ耳が動くペルシカに我慢が出来なくなつて立ち上り、もう誰もいなくなつたらボを見渡す。

熱くなった顔を冷やすのにはこの部屋の寒い位の空調が丁度良かった。

「それとクルーガーから話しは聞いたわ、確かに悪くない要件だった」

「じゃあ……」

「ええ、シールドの替えは手に入ったから準備が出来たらG&Kに向かって」

「……………良いのか？」

クルーガーの案件を請け負うのは良いが、それを実行するとなると数日はこのラボを空ける事になる。

婆ちゃんが居ると言えばそれまでなのだが、古い友人の一例もあつて不安がぬぐえない。

「良いの、M1895も居るしそうそう簡単にテロを起こせるような場所じゃない。だから出来るだけ多く連れ帰って来て、データが多いに越した事ないから」

「了解、ペルシカがそう言うなら従う」

「それから——」

「どうした？」

「——ヘリアンに伝言、『合コン失敗14回目オメデトウ、パチパチパチパチ』」

「直接言いなさい、お馬鹿」

「お、起きたかスクラッチ、大丈夫か？」

「ああ、ありがとうナガン婆ちゃん。何ともないよ」

「まったく、指輪を見たくらいで倒れおって……。そんなに驚く位ならさっさとペルシカに言えばよかろう」

「……………なんのこと？」

「はあ……………、そうやって誤魔化すのは構わんが。少しは素直になれよ？ ……まったく困った奴らじゃ」

「……………、そういうや毛布ありがとう。朝もそれでグツスリだったよ」

「え？ 何の事じゃ？ ワシは毛布など運んでおらんぞ？」

「…へ？」

話し込むナガンとスクラッチを余所に、ペルシカは自分のデスクでニッコリ笑ってコーヒーを飲み、その日は終わった。

おっさんと任務と

「……………お久しぶりです、クルーガー隊長」

「ああ、その嫌そうな顔でなければ素直に挨拶できたんだがな」

「そりゃ無理があるでしょう、ついこの間も予想外の出来事で会っているんですから」

強面のおっさんことクルーガー、従軍経験ありの歴戦の猛者、現在のG&Kのトップだ。

現役を引退しても尚、そのガタイの良さと滲み出る庄には感服する。因みに俺がおっさんを隊長と言うのは俺もおっさん鍛えられた口であるから。まあ、イヤな思い出だかけであんまり会いたくは無かったよ。

俺の言葉に眉を動かしたおっさんは瞳を一度閉じるとまた口を開く。

「ヘリアンの事は感謝している、無傷で送り届けてくれるとは思わなかったからな」

「心は無傷じゃないですよ？」

「時に辛辣だな、お前は」

「ペルシカ程じゃないです」

肩を竦めて頭を振り、薄く笑ってこの間の出来事を思い出して何とも言えない気持ちになる、そういうえば酔っていたのによく逃げ切れたな、俺。

そんな俺を置いておっさんは自分のデスクに戻ると、キーボードを叩き、巨大スクリーンに複数の戦術人形たちの画像が映し出された。

「現在、鉄血と我々グリフィンは膠着状態にある。重要な情報と手に入れた代わりに複数の人形たちが消息不明となった」

「捕虜になったか行動不能に陥ったか、何にせよ戦力が減った事には変わりありませんね」

「今回はこの人形達が消息を絶った地域に潜入し、それらの回収だ」

「……足はどうなります?」

クルーガーのおっさんが言ったように今回の俺の仕事は、消息を絶った人形たちの回収。一部の人形を除き、バックアップを取れる人形は本体を捨て任務を優先させる事態が増えたという。

その際に逃げ延びた人形が鉄血の目を逃れ廃墟と化した区域に潜み、作戦実行中の指揮官の人形たちが見つける事も少なくないとか。

しかしそんな事をしていけば当然戦力は減る、新たに人形を作り出すにもコストは馬鹿にならない。故に戦場を知っていて、身近な俺に白羽の矢が立ち人形回収の任を押し

付けられた。

ペルシカ曰く「バックアップはあくまでバックアップ、熾烈な環境で人形が得たデータは貴重なもの」とのことだ。まあアイツの事だ、自分が作り上げた人形がそのままにされるのが癪でもあるのだろう。

「作戦で使っている拠点までヘリで送る、日数にして三日だ。三日後の早朝を目安に帰還のヘリを送ろう」

「……………了解です。……………ピクニックで済みますか?」

「ふう、済んだらお前の腕は無くならず今もそのままだ」

「ちよつと隊長ブラックすぎますよー」

カラカラと、おっさんが珍しく飛ばした冗談に自ら笑い左手を360度回転させる。そんな様子を一瞥しておっさんは懐かしそうに達観した様子で微笑んだ。

やめろ気持ち悪い(無慈悲)

「お前の牙はまだ折れてなかったか」

「代わりにお手手が吹き飛びましたよー」

「まったく、いつまでも軽口がぬけんな。スクラッチ」

「だからペルシカリアと一緒に居られるんですよ、クルーガーのおっさん」

もう視線は合わせず、粗方の情報を携帯端末に移し社長室を後にする。俺の乾いた笑

いとおっさんの含み笑いが重なった気がして何だか面白く感じた。

「あれ？ スクラッチ子さん。 お久しぶりです」

「久しぶりカリーナ、調子はどう？」

「お陰様で新しい指揮官様と一緒に頑張ってます」

ブロンドの髪をサイドで纏め、ヘッドセットと黒いサングラスを頭に掛けるグリフィン部隊の後方幕僚カリーナ。にこやかな笑みと人付き合いの良さはグリフィンでは知らない者が居ない程有名だ。

しかし――

「珍しいですねー、スクラッチさんがグリフィンに来るなんて。そうです!! 再会を祝して何かお買いになられますか!？」

お金が大好きなちよつと困った女性である、補給物資調達が主な彼女の仕事ゆえにグ

リフィンでは彼女を介して足りないモノを買うことが常。

今回もある程度の装備は揃ったものの道中では手に入らない物、主に弾丸や消耗品をここで分けてもらおうつもりだった。因みにカリーナの愛称がカリンだったりする。

「勿論、32ACP弾と12ゲージを貰えるかな」

「かしこまりました!! お幾つにいたしましょう」

「そつちに支障が無い分が良いよ。あまり使う事が無い様にするつもりだし」

「わかりました、それでは少々お待ちください」

元気に倉庫の中に消えていくカリーナの後姿を見送っていると、不意に何処からか視線を感じて振り向く

「あ……………」

先程までの朗らかな雰囲気は何処へ行ったのだろう、一瞬にして固まる空気に半ば笑いながらもれそうになるも開いていたドアから顔を覗かせていたヘリアンさんと視線が合っている、言葉につまる。

何時ものクールビューティが成りを潜めて視線があちらこちらに駆け巡っている、酒に酔い潰れた姿を見せてしまった羞恥心でもあるのだろうか……………

ぶつちやけペルシカのせいでもう何も思う事は無いんだが……………

「ひ、ひゃしぶりだな」

「うん、合コンぶりだね、ヘリアンさん」

ピシッ——

そんな音が聞こえそうなレベルで固まったヘリアンさんを前にして、俺は思う。
結構苦労したからこれくらい許してね、と。

「あ、あの時は……お世話になりました……」

何とか再起動して顔真つ赤にしながら頭を下げる彼女を前に、罪悪感で一杯になった自分を小心者と思いながらとりあえずこの話題をぶった切る事にする。

「いいのいいの、昔は俺が世話になったしアレは恩返しって事で」

「そ、そうか。ありがとう、スクラッチ。」

「いえいえ、カーリーナに御用ですか？」

「ああ、補給物資で少しな。君はクルーガーさんに呼ばれてか」

「そうです、ちよつと長くなりそうで……」

世間話をしながら合コンの事はお互いに触れないようにして場を濁し、数分。

倉庫の中から戻ってきたカーリーナから、32ACP弾を受け取り二人に挨拶して俺はその場を後にした。

『合コン失敗14回目オメデトウ、パチパチパチパチ』

途中、ペルシカの話題になって思い出した一言を喉元で抑え込んだまま

深夜、闇に紛れて飛行するヘリの中で彼は手にしたベネリM4ショットガンの感触を確かめる。

外灯の無い暗闇の中、都会とは対照的に呑み込まれそうな風景に臆する事無く見やり出発前にペルシカに言われた一言を思い出す。

『腕なら、いくら壊しても良いから』

出発前の日とは打って変わって少し暗い雰囲気醸し出した女性に、その時はスクラッチ自身も言葉の意味を測りかねたがきつと今更になって寂しくなったんだろうと思ふ様にして出て来た。

研究に没頭しようが、人形の為だけに生きていくんだと豪語し、天才だと周りから囁し立てられようと根本的には一人の女性。

気兼ねなく話せる友達を自らの利益の為に、危険区域に踏み込ませる事が今更怖く

なつたんだと。

ちよつとだけ自分が居なくなるのが嫌なのだ、自意識過剰だが思う様にしたのだ。

操縦者から目的地まで間もなくだと連絡され、装備を確認した彼は手にしたベネリM4を持ったまま窓から地上を見る。

闇夜に慣れてきた瞳で地上を見渡すとうつつすらと見えた複数の建物に目が良行く、減速を始めたヘリの中でバックバックを引き寄せ地上スレスレで静止した瞬間にドアを開きバックバックを投げ飛び降りる。

「――御武運を」

操縦者からお決まりのセリフを聞き流し、飛び去っていくヘリを背中に灯りの着いていない拠点目がけ走り出す。

グリフィンの拠点とてすべてに警備が居るわけでもなく今回のこの拠点は無人であつた。

いつ何時何処から攻めてくるか分からない鉄血を相手に、森の中の拠点を守り続けるなど不合理極まりない。

そも、灯りが存在しない場所で電気を点けるなど自殺行為だろう。

息を殺し扉の前で立ち止まり周囲を警戒、平屋であり入口は玄関と裏口のみ、一瞥した時点で戦闘痕は見受けられず窓も割れていない。

安易に考えれば侵入者が居ないようにも思えるが、偶然この場を見つけた鉄血が使用していないとも考えられない。

静かに扉を開き、警戒しながら拠点内に侵入したスクラッチはベネリを構え部屋を確認していく。

一番奥の部屋を残して確認し終え、ベネリを構える手に自然と力が籠る。

警戒しなければいけない理由があつた、それは視界の端で見える机の上に置かれたグリフィン製の缶詰だ。虫も集らず匂いからして時間は経っていない。

誰かがこの拠点に潜んでいる。希望的観測ならばグリフィンに従属する戦術人形が望ましいが、隙を見せて蜂の巣にでもなればシヤレにもならない。

だが、もしかしたら運が良いとスクラッチはほくそ笑む。

何故ならテーブルに置かれていた缶詰は一つ、そして最後に残った部屋が比較的狭い個室であるからだ。

戦術人形はダミーネットワークと言うシステムで、主機が最大四機の自分と同じ従機を統率し戦う事が出来る。

鉄血の戦術人形もそれは変わらない。もし相手が複数ならば部屋の死角にダミーを潜ませ攻勢に回る事も出来た。

それが無いのは、それほど消耗しておりダミーも無く。戦いを避けやり過ぎそうとし

ている可能性が高いからだ。

意を決しドアノブを回し、僅かに開くと銃口で押す様にしてドアを開き覗き込む。

その先に見えるのは大きく空いた小さな窓と月明かりに照らされたベッド、そして小さな机と椅子。

足音を最小限に部屋に踏み入り、左右を見渡す、そして――

「――ッ!!」

開いたドアの影から飛び出した小さな人影が黒い棍棒のようなものを手に彼に襲いかかり。

スクラッチはソレに即座に反応しベネリの銃口が人影に突きつけられ、棍棒らしき物体が彼の頬寸前で止まる。

「……………ふう、運が良いな。今日は」

「…人…間……………」

小さく息を漏らしてベネリの銃口を下げたスクラッチは嬉しそうに笑う。彼の顔を見てポカンとした金髪の少女とその手にした棍棒のような銃。

ウエルロッドMkIIを一瞥して口を開いた。

「こんばんわ、お嬢さん。俺はG&Kから派遣されたスクラッチだ、君たちを迎えにきた

よ」

銃を担ぎ右手を差し出す彼の顔は子供を見つけた親の様に穏やかなものだった。

異名と森と奥の手

「——はぐれたのがスコープオン。鉄血のグレネードと弾幕で分断されたのがM1 ガーランド、と。こっちの情報と差異は無いか」

「はい、少数での索敵が任務でしたので」

早朝、自己紹介を終えた俺と戦術人形ウエルロッド Mk I I は缶詰を片手に情報の交換をしていた。

黒を基調とした軍服の様な身なりの彼女、薄汚れた服に、破けたジャケット、黒い靴には飛び跳ねた泥の跡も確認できた。

それなりに憔悴していたようだが、持ち込んだ食料とグリフィンの名を聞いて安心したのか、グツスリと寝た為すぐに回復したらしい。

テーブルを挟んでここいらの地図をタブレットに起こし、指を差し合いながら場所と逸れた面子の話をしている。

「スコープオンとは昨日の昼頃まで一緒に、ガーランドとは一昨日から……。場所は？」
 「窓越しに見える森林、距離からして5〜6 Kmです。その時点で私は残弾もなく、彼女も最後のマガジンでした」

「歩いて一時間あるかないか……。雨が降っていたようだから足元もぬかるんでいたのなら、そうそう遠くへは行っていないか……」

「人形の中でも活発な娘です、それなりに距離は稼いでいるかと……。それよりもガーランドの方が私は心配です」

グリフィンの指揮官から手を切られた後、鉄血人形に狙われ三人で逃走を凶っていたらしい。

当然の判断だが、それにしてもどうもウエルウッドの顔が晴れない、何か理由がありそうだ。

頼むから一般兵以外は出てくれるなよ……

「……………彼女は何処で？」

「森林を超えた先の廃墟街です、偵察をしていた所この区域に居た鉄血、エクスキュージョナー 処刑人に目を着けられたので」

「……異名^{ネーム}付き、か……」

遂に割に合わなくなってきた。フラグを自分で建てた結果がコレだよ。

異名付き、鉄血兵にも勿論^{リップ}切り裂き^{バグ}魔やスズメバチ^{グエスビド}といった名称を持ったユニットが複数存在する。

しかし異名付きはそれらを従えるボスの存在、それぞれに特化した能力を持ちえグリフィンの戦術人形達と戦い続けている。

当初異名付きが複数確認されたという話は無かったが、新しい情報では他の戦術人形同様、ダミーネットワークを介して動く同じ個体も確認されたらしい。

量産型では無い故に、一個人でもその戦力は凶り切れない。

本音を言えば今すぐ逃げ帰ってクルーガーのおっさんの拳骨とペルシカの文句を聞いていた方がマシに思える。

「……………」

「…? どうかしましたか?」

「いや、何も。それじゃあ30分後には出るよ、君はどうする?」

「勿論私も同行します、逸れた地点は記憶しています、何より森の中は鉄血の狙撃手が潜んで居るでしょうから」

だが向かいで座っているウエルツドに見ればそんな気持ちも消えた、戦いの場で身な

りに気を使う事など馬鹿らしく思えるが、それでも彼女の服や顔、身体の至る所に見える傷跡からそれなりの修羅場の中に居たのだと判断できる。

もう十分頑張った、ならば今度はそれに見合うだけの救済が必要だ。傷の治療、人形で言う修復と休息。あつて然るべきだ、文字通り一時は捨て駒とされてしまったのだから。

意気込むウエルウッドにバックバックから32ACP弾を手渡し、準備に取り掛かる。

鉄血兵だけで済むか、それとも異名付きと合いまみえるか……。

こういう時に限って運がないんだよな、俺は……。

宙を舞う指、弾丸、甲、破片諸々、スクラッチの利き腕である左拳は真正面から打ち合った一回り大きい黒い拳に粉碎される。

彼の周囲でその光景に声を上げる戦術人形達を余所に、ふと脳裏に数日前のペルシカの声が響いた。

『腕なら、いくら壊しても良いから』

それがどんな意味か、今更に彼は理解する。

通常よりも遅く、スローに見える世界の中、相対していた鉄血人形の大きな拳がその身程の巨大な刃を構えている。

対戦術人形用の剣、人間の彼なら容易く切り裂かれるだろう。左手を砕かれた事で止まっていた思考がフル回転し歯を噛み締め右手のベネリを引き寄せる。

死に直面した瞬間に彼女の言葉を理解した自分自身に虫唾が走り、同時に感謝する。

「——死ぬるかアツ!!」

声を荒げ、笑みを浮かべる鉄血人形、エクスキューションナー 処刑人に吐き捨てる。片手での無謀極まりな

い射撃、当たるか当たらないかの二つに一つ。

振り下ろされるよりも早く引き金は引かれ、炸裂音が森に響き渡った。

ウエルウッドとの簡単な情報交換から既に4時間余りが経過していた。

当初の目的通り、森へと足を進めた2人はスナイパーの目を盗み、時にはウエルウッドによる不意打ちで戦闘不能にして進んでいた。

逸れた地点に到達、スコープオンが進んだとされる道筋を見つけ足音を追い運よく彼女を発見する。

泥に汚れた顔と警戒心から来る鋭い視線にスクラッチは手負いの猫を連想するも、隣

に居たウエルウッドのお蔭で問題なく合流が出来た。

予測通り弾を撃ち尽くしていた彼女に弾丸を渡し、次の目標であるガーランドの捜索に移った。

しかし廃墟街での捜索中、斥候と呼ばれるドローン型の小型機械に発見される事態に陥り、姿を暗ますも処刑人に発見され来た道を引き帰す事となっていた。

「クソがッ」

舌打ち交じりに吐き捨てられた言葉と共に怯んだ処刑人は数歩下がりが、その手は止まる。その期を逃さず飛び退いたスクラッチは使い物にならない左手を一瞥し左隣で弾幕を張る戦術人形ウエルウッド、処刑人に出会う前に見つける事が出来たスコープオンに声を掛ける。

「ウエルウッド、スコープオンと先に拠点へ帰還しろ!!」

「無茶な、一人で引き付けるつもりですか!？」

「俺より君たち戦術人形の方が足が速い、拠点に戻ってへりを呼んでくれ」

「ですが「行こう、ウエルウッド」スコープオン!？」

「おじさん、助けてくれてありがとね。じゃあへりを呼んでくるから帰って来てよ?」

「——お土産持って帰る、楽しみにしてくれ」

足早に走り去る音を背中にスクラッチは右手にベネリ、左腕にシールドを展開すると

面白そうに笑みを浮かべる処刑人を見据えた。

勝利に確信している瞳、負けるはずがないと思考し、理解している表情。

対してスクラッチは先ほどまで浮かべていた笑みを消し、真剣な表情へと切り替える。

その目に宿るのは死を覚悟した兵士の意味ではなく、打倒する為、勝ちへと向かう意志。負けないという心の表れだった。

待ち受ける様に棒立ちになる処刑人、スクラッチはその状況にも動かず、ただ時間が流れた。

「時間稼ぎか、人間」

「どうだろうね、アンタの出方を待ってるだけかもしれないぜ？」

「フン、お土産とか言っていたが、まさか俺の首を獲るつもりか？」

「もしかしたら森の中に咲くお花かもな」

「ククツ……——舐めてんのか？」

処刑人の言葉を皮切りに衝突する両者、金属と金属がぶつかり合う甲高い音が鳴り、炸裂音が響く。

ハンドガンから飛び出す弾丸をシールドで受け止め、懐に入り込み片腕だけのベネリが火を噴く、しかし相手は戦術人形、人間ならざる速さで後退し散弾が貫くのはその黒

い長髪だけ。

狙いが定まらないのなら当たる距離へと入り込む、荒削りな判断だが援護も無く、最早片腕が機能しない彼にとってソレが最良と言える。

それでも尚、余裕の表情を止めない処刑人は剣でスクラッチに斬りかかり、一撃を躲し返す刃をシールドで受け流す。

「チィ……!!」

「ハハッ、さつきまでの余裕はどうした?」

息を吐く間も無く振るわれる斬撃を避けてはいなし、掻い潜る。

一瞬の間隙についての反撃であつても容易く躲され、無尽蔵に近い戦術人形の稼働力、有限な人間の体力の差が見え始める。

次第に追い詰められ呼吸が荒くなるスクラッチ、ぬかるんだ土に足を持っていかれ、処刑人の連撃により体力の殆どを消耗させられた。

歯を食い縛り胸を大きく揺らす彼はもう一度ベネリを掴み直し、左腕を一瞥して傷だらけのシールドに見切りをつけた。

「ッ」

息を整え、一気に加速、向かい立つ処刑人へと我武者羅に前進し一か八かの勝負を仕掛ける。

しかし処刑人の表情は崩れない、むしろ笑みを深め顔面に突きつけられたベネリを蹴り飛ばした。

「!?」

宙を舞うベネリを余所に処刑人の右腕はスクラッチの左腕を掴み上げる、常軌を逸した力で片腕だけで持ち上げられた彼は目を見開き処刑人を睨みつける。

「捕まえたぞ、人間。虚仮にしてくれた礼だ、まずはこの左腕から切り刻んでやる」
逆手に持たれていた剣を持ち直し大きく振りかぶられる。黒い刀身が木漏れ日により淡く輝き不気味さを際立たせる。

常人ならば泣きわめきそうな場面で彼は表情を崩さずにまだ睨みつける。

「いい度胸だ、くらえ」

「——お前がな」

処刑人が左手に力を込めた瞬間、一転、スクラッチの顔が笑みに変る。

『これ』を知っているのは本人と、製作者のペルシカリアだけであり、最後の手段。

——ガシャッ

笑みと同時に処刑人の右腕にかかっていたスクラッチの全体重が消え、その手には灰色の前腕から肩までがぶら下がり。

本体であるスクラッチは処刑人の足元で笑みを浮かべていた。彼の左腕は本人の意

思で切り離せる。

啞然とする相手を余所に彼は脇目も振らずに駆け出し、処刑人の握る腕が処刑人を巻き込んで爆発を起こした。

爆炎と衝撃、飛び散る泥に吹き飛ばされ回転しながらも立ち上がり駆ける。

『映画の中だけだと思っていたら大間違いよ』

左腕を着けられた際に言われたそんな言葉が彼の脳裏で再生される。片腕に爆弾を背負うなど出来るかと最初は反論した彼も今となつては彼女に感謝するしかなかった。

「クソガアアアアアアアアアアアア!!」

底冷えするような雄叫び、破損したのかより機械らしい重低音が木霊してスクラツチの耳に届く。

思わず苦笑いを零した彼が走りながら振り返り、見つけるのは顔半分の人工皮膚が剥

がれ落ち、赤く光る眼球、吹き飛ばされ内部の機関が露出している処刑人だった。

「何これホラー!？」

大ぶりの剣を振り回しながら我武者羅に前進してくる相手に、真面目だった彼は顔を隠しふざけた言葉が飛び出す。

しかし足は止めない、時間稼ぎはまあまあ出来た。後は逃げ切つてヘリが来ることを願うしかないと思っていた矢先のことだった。

「——屈んで!!」

「ッ」

前方から聞こえた言葉に、経験からか即座に反応した彼は滑り込んだ大樹の陰で潜んでいた金髪の女性を見つける

まもなく女性が構えていたライフル銃が発砲され、悲鳴が木霊した。

「急ぎましょう!!」

「…ああ!!」

ライフルを担いだ女性、M1ガーランドに促され二人は無事にその場を後にした。

—— 帰還へりの中での一時

「ああ……疲れた」

「お疲れ様です、スクラッチさん」

「おじさん大活躍だったね、腕取れちゃったけど」

「三人を見つけれられたから別にいいさ、あとまだおじさんじゃない」

「私、まさか腕が爆発するとは思わなくて驚きました」

「君たちもよく知ってるペルシカのお蔭だよ」

「え、まさか改造されたの」

「ありえそうですわね……」

「ああ、だから処刑人とあそこまで……」

「されてないされてない、てかガーランドは偶然あの場に？」

「処刑人が騒ぎ出したのが聞こえまして、後を追っていたら偶然。間に合って良かったです」

「本当に助かったよ、ありがとう。因みに何処を狙ったの？」

「目です」

「……すげえ」

「流石ガーランドですね」

「痛いんだよね……目……」

「うふふ」

トラウマと義手とただいま

「それじゃあ、この書類を明日までには纏めておいてくれるか？」

「はい、分かりました」

「うん。まあ今日、明日と主任が働かないだろうから10分くらい休憩してからで良いよ。よろしくね」

『16 Lab』には勿論ペルシカリア以外にも社員が居る、その中で今声を掛けられていたのは入りたての将来有望な女性社員だ。

新人としてまずは小さな雑用をしながら仕事を学び、やがてはペルシカのサポートをする立ち位置。

よってまだペルシカリアという人間を掴みかねている事、ラボ内が冷蔵庫を思わせる位に寒い事。偶にラボに顔を出す頬傷の男の事もまだよく分かっていなかった。

今日も今日とて、天才と呼ばれるラボの主任ペルシカリアは朝に適当に仕事を終わらせ、戦術人形の巨大な腕らしきものを造り上げると『ちよつと考え事』と一言副主任に

告げてラボの使われていない部屋に閉じこもった。

その始まりはつい三日ほど前だったと彼女は記憶している、ラボの中で自分にも声をかけて和ませてくれるM1895戦術人形がその光景を見て

『メンドクサイ奴らじゃ……ホントに……』

なんて呟いていたのも記憶に新しい。いつもニコニコしている彼女を知っている手前、こんな呆れたような顔を見るのは意外で印象に残ったのだろう。

ペルシカリア、戦術人形の核であるコアを開発し、烙印システムを開発した戦術人形の根本を作り上げた誰もが認める天才。

天才は何処か頭の螺子が飛んでいる、そう誰かが言っていた。

普段のだらしない姿を見ていれば何となくソレが理解できるような気がしたが、人をそう簡単に理解など出来るものではない。

手にした紙コップの中から白い湯気が上がり、温かい飲み物を口にした彼女は時計を一瞥しそろそろ仕事に戻ろうかと思つた矢先の事だった。

「……………いないな…」

徐にラボの扉が開き、何度か顔を見た頬に傷を持つ男が顔を見せた。普段は黒い長袖のジャケットだが、今日は上下迷彩柄の服装で左腕が肩から丸々存在していなかった。

空の袖が空調で揺らされ無い事が強調されている。どうやら突然の登場に彼女の先

輩達も驚いたのか話し声が途絶え、遠くで何事かと口になっているM1895の声が聞こえる。

そしてふと、その男の視線が彼女と重なり数秒立つて男は口を開く。

「ああ、どうも。仕事中にすみません、ペルシカは何処にいますか？」

開口一番にペルシカの名が出て、気兼ねなく名前を呼んでいる辺りに若気の至りか、その関係が気になる。

先輩たちの話によればペルシカとは旧知の中で、その腕を買われお抱えの警備員として雇われているとか……。

過去にペルシカ関係で軍隊が動く事もあったというからにはおかしい事は何もないが、見た目からして強そうには見えない詳細不明の男がお抱えの警備員と言うのが引つかなかったのだ。

実は見た目に反して凄腕の傭兵だとか、ペルシカに改造された改造人間、はたまた旧知の中だから雇われた唯の友人、もしかすると恋び——

「——あの、顔が赤いですけど……」

「ヒヤツ!? あ、ああ、す、すみません。主任ならあそこの部屋に……」

トリップしていた思考が男の言葉で引き戻され、盛大にドモリながらも彼女はペルシカが消えた部屋のドアを指さす。

居場所が分かった男は一言札を言うとか何か呟いてその部屋の中に消えて行った。

深呼吸を何度か繰り返して落ち着いた彼女は、冷静になった頭で考える。先ほどの服装は恐らくコスプレではない、明らかに何かがあった汚れ方をした服で平然としていた男。

やはり凄腕の傭兵なのだろうか、だから今回は雇い主であるペルシカの命令でこの場を離れ、ペルシカはその安否で引き籠りになったのではないかと。そして今帰還してその報告なのか……。

いや、ペルシカに至ってはほぼこのラボから出ないという話だから引き籠りには違いないのだが……。

もう一つ気になる事は、左腕が無くなっても平然としていること、やはり改造人間なのか……。まさかペルシカはその内人形と人間のハイブリッドを生み出すのではないかとオーバーロードし始めた思考は。

——ガッゴン

——バタタタタ

——ドン

「——ちよっ!? 何!? ファッ

!!?!?!?!?!?!

」

それなりに熱い壁を突き抜けて聞こえてくる、先ほどの男の悲鳴と騒音に彼女は現実
に再び引き戻され。

「なんじゃ……スクラッチの奴、帰ってきておったのか……」

何時の間にか隣に立っていたM1895ナガンが曖昧な笑顔で小さくため息をつい
ていた。

「お約束どおり、ウエルウッド、スコープオン、ガーランドは連れ帰りました。途中鉄血
のハイエンド機、処刑人と遭遇、交戦の末に退けましたがあの拠点はもう足が付いたで
しょう」

クルーガーのおっさんを前に、左袖を揺らしながら淡々と今回の顛末を説明し小さくため息を吐く。

帰還からだいぶ時間が経ち、あの夜から二日目。気が付いたら夜が明けていた。それなりに久しぶりの実戦だったし仕方ないかとも思える。昔はこれが普通とかブラックすぎません？

「ご苦労だった貴重な戦力を連れ戻してくれて感謝する」

「貴重なら捨て駒にしないで下さいよ……、当事者でもないのにあの娘達を見たら俺が罪悪感で変になりそうでした」

帰還ヘリの中で数分前まで死線に晒されていたというのに、笑顔で談笑する戦術人形を見ていると彼女らの境遇に何も思わずに居られるわけもない

それでもそれなりに感受性があると自負している手前、よりその笑顔に痛む心もあるのだ。

「変らんな、お前は」

そんな俺を達観した様子で見つめるおっさんに肩を竦める、そんな顔されるぐらいなら甘い、と一言で切り捨ててくれた方が気が楽だというのにイヤな人だと思う。

「こんな世の中です、倫理が、人権だどうの言うつもりはありませんが自分位はマトモで居たい」

「真面か。だからこそお前は軍を辞めたのだったな」

「もう過去ですよ、過去。それに俺は別に戦いが好きだった訳ではなかったの」

「そうだな、引き金が引きたいだけの大馬鹿者だ」

「それに目を着けて来たのは隊長じゃないですか、ヤダー」

「お前のせいで何度弾切れになった事か、この傷の事は一生忘れん」

「一杯あり過ぎてワカラナイナー」

「お前とお揃いで頬傷だ戯け」

「クルーガーのおっさんとペアルックとか御免蒙ります」

「しまいには叩きのめすぞクソガキ」

「片腕無い人間に本気の軍人とか、大人気無いと思いませんか？」

良く回る舌だと思いながら何年ぶりの懐かしいやり取り。

口調は荒いが平然と何時もの様子で言葉を返してくるクルーガーのおっさん、従軍時代によくやったやり取りだ。一頻り言い合った後、もう終わりだと思ひ踵を返す。

「——また頼む」

「……、ペルシカが良ければ俺は俺は何時でも」

グリフィンで連れ帰った人形達と別れを済ませ、早々にラボに帰った所何時もならデスク周りにいるアイツが何処にも居なかった。ラボを出るなんてあり合えないので偶然目があつた研究員に居場所を聞いて俺の部屋に入る。

部屋の中で見えたのはパソコンモニターの光だけで淡く照らされたソファに、丸まるように寝転んでいるペルシカだった。

「……………(珍しい)」

心の中でそんな感想を呟いた俺は、ジャケットを脱ぐとデスク近くの椅子に腰かけて小さく息を漏らした。

首元や頬、髪の毛には飛び散った泥が小さく固まっている、早々に洗い流したい所だがどうしたモノか。

考えでは早々にペルシカに帰った事を伝えてシャワーを浴びるという算段だった、しかし当然の本人が寝ているとは計算外だった。

時計を一瞥すればまだ午後になって数時間、社員がまだ残っているような時間だが俺の部屋で昼寝をしている、加えて大好きな研究をほっぽってまで。

研究が行き詰ったのだろうか、それにしても荒れた様子は何処にもない。むしろ目に見えてムキになって今も研究していた事だろう。

本人が寝ても尚、本物の動物の耳の様にピコピコ動く耳をボンヤリ見つめながら起きそうにない事を確認して立ち上がる。

先に風呂に入るとしよう。意外と神経質なコイツにとやかく言われたくないからな。

「……んん……」

そう思いながら静かに歩き出せば彼女が寝返りをうって毛布がずれる。薄着に白衣しか着ない故に冷えそうで見えていられない。

起こさない様に毛布を掴んでもう一度掛ける。

「……………んん……………」

僅かな動きを敏感に感じ取ったのか、小さく唸り臉が動いてその赤い瞳と視線が合う。

何度か瞬いて徐々に開いた両目、何も言わずに数秒固まるペルシカ。何でか固まる俺。なんだこの構図、ゲーム序盤の初対面の主人公とヒロインか？

「……………、スクラツ…チ？」

やつとの事で口を開いたペルシカは信じられない物を見たような視線を俺に向け続ける。もしかして頭の中で俺の事勝手に殺したのかお前。

「ああ、ただいま」

別にやましい事は何もないので俺は素直に言葉を返す、まあ左腕の事は悪いけれど死ぬよりだいぶマシだろう。また作ってくれるとも言っていたしな（安直）

「——ッ」

そう考えていると唐突にペルシカは起き上がり、何も言わずに跳びかかりそうな勢いで迫ってくる。

無理な体重移動をした事で、背もたれを挟んで向かい合う形になったペルシカはソファを勢いよく倒しながらもバランスを崩さず迫ってくる。

鬼気迫る表情という奴だろうか、詰んであった暇つぶしの漫画や資料、古本を薙ぎ倒し真っ直ぐに迫ってきた彼女に何故か本能で逃げてしまう。

「ちよっ!?! 何!?! ファアッ!?!」

しかしあくまで一人部屋として割り当てられた部屋の中ではそうそう逃げられるはずもなく、まさかの逆壁ドンである。

そして何を思ったのか、両手を伸ばして俺の顔を最初にペタペタと触り始め首、徐々に下がる形で身体を触り始めるペルシカ。新手の身体チェックかな。

呑気にそんな事を考えて天井を見上げているとその手がピタリと止まる。どうかしたかと思えばその手は左肩で止まっていた。

そして小さく震えている。

「……向こうで鉄血の異名付きと交戦したんだ、ごめんな。持つてかれたよ」

落ち込んだ様子で視線を下に向けている彼女に声を掛ける。しかしあの義手が無ければ今頃俺は良くて拷問部屋、悪くてあの場でなます切りだっただろう。

むしろ命を救ってくれたとも言えるのだ。ちよつと許してほしいと思う。悪いとは思うがケモ耳までシヨンポリと言わんばかりに垂れているのは言葉に困るのだが。

「……………いいい…」

「ん？」

「もう、いいから…。腕なら作れる、から…」

「……………」

「おかえりなさい」

「ただいま」

何時もよりも覇気が無く、平然としてもいない。

腕が無くなった事でまたトラウマが刺激され、責任を感じているのか。それは俺には分からないが彼女は進んで俺に左腕を与えてくれた。

それでもう終わった話なんだ、いつまでもお前が責任を感じる事柄じゃない。

眉を八の字にししながら無理に作った笑顔で声を掛けられても俺は嬉しくないし、苦しくなるからやめてほしい。

「俺を危険地域に送り込んだのが後になって不安になったんだろ？」

「ツ……」

俺の今の顔はどうなっているだろうか、呆れたような顔をしているのか、それとも苦笑だろうか。

「帰って来たんだ、夢でも幽霊でもない」

「……………」

「触つただろう？　ペタペタペタペタ、間違いなく俺、スクラツチだ。だからもう終わり、むしろありがとうな」

「え？」

感謝の言葉を口にしてそつと目の前で疑問の声を上げる幼馴染を抱き寄せる、両手とは行かない故に納まり片腕には収まらないがそれでもいい。

「ペルシカの義手に助けて貰った、何度もな。だから終わりだ、何時ものだらしない顔でニヤニヤ笑っててくれよ」

子供をあやす様にペルシカの頭をポンポン触りながら何時もの調子で笑って見せる。

そろそろ本調子戻ってくれないと俺の心臓が過負荷で死にそう……。早く戻って（切実）
こちらを見上げていた彼女の目じりにうっすら涙が溜まっていた事に気が付くも、俺
の胸に顔を埋めて数分すると、そつと一步離れたペルシカは何時もの笑みとは違うスツ
キリした顔で笑みを作った。

「————汗臭い」

「ヒゲエ
?!?!?!?!」

———— 次の日

「のう、スクラッチ」

「何、婆ちゃん」

「お主の左腕はそんなにゴツかったかのう？」

「ああ、これね……。ペルシカが新しくくれた仮の腕」

「ほう……。？ 随分大きい腕じゃが、握力が強いのか？」

「ううん、こここのボタン押すとき……」

——ガッシャン!!

「……………、アイア○マン……。？」

「俺のパソコンで最初のを見たんだって……」

「何で赤くないのじゃ……」

「マークワンが一番頑丈に見えたんじゃない……。？」

「心配しての行動がおかしい方向に向かっているんじゃない……」

「てか、さりげなくトニーよりコンパクトに仕上げてるの怖い」

「のじゃ……」

「♪」

日常と嫉妬と知り合い

「……………ああ……………ふわああ……………」

グリフィンでの任務からもう一週間近く経っただろうか、相も変わらずラボの片隅にある自室で暇を潰す毎日。思わず欠伸掻いて天井を見上げる。

あの一件から俺の左腕は新しく作り直す事になり、昨日まではあの義手を着けていたのだが何分、肩にかかる負担がとつても大きかったので今は取り外し中だ。

片腕が無い生活には慣れていいるから別段と不便ではない、今日も今日でネットサーフィンだ。

「スクラッチー、暇じゃ」

心の底で、あれ、コレ、俺はヒモかな？　なんて真理に気が付き始めた瞬間にドアを開けてナガン婆ちゃんが入ってくる。

閉まるドアの向こう側がそんなに慌ただしくなかったので婆ちゃんの仕事も無いんだらう。

「ん、映画でも見る？」

「映画が好きじゃのう、何があるんじや?」

ソファの背もたれに預けていた身体を起こして、パソコンのキーを叩く。

何時もの仕草で帽子を脱いだ婆ちゃん俺の隣に座ると画面を覗いている。

「えっと、俺がお気に入りに入れているのは……」

「何で半分以上の語尾に『オブ・ザ・デッド』が着いてるんじや……。お主ホントにゾンビが好きよのう」

「ヒーローモノも好きだよ? あとシユワちゃん」

「戦術人形に戦争モノとか面白くないじやろ、もつとほのぼのとしたのは無いのか?」
「……あつ、それならコレは?」

「なんじゃこれ……。アンドロイドにロボット見せるのか? というよりコレの何処がほのぼのしてるんじや」

「いいからいいから」

—— 2時間後

「あの生意氣じゃった小僧は何処じゃ……」

「最後の最後で嫌な奴が大人になる、映画あるあるだよな」

雰囲気を出す為に部屋を暗くしてたつた今エンドロールが見終わる、序盤での主人公とカイジユウのシーンで思ったよりも迫力を感じたのか俺の上に乗っかって映画を見ていた婆ちゃんがそんな事を口にした。

まあ、主要部分が殆どCGの映画だし、金が無くて他のロボットたちが囁ませになつて即退場するのは仕方ないね。

「最初から三機で頑張っておればバケツみたいな奴、勝てたじやろ」

「チエルノは俺ももつと活躍見たかった、設定と見た目、あとあの夫婦ホント好き」

「ワシは冒頭に一瞬映った白いのが好きじやの」

「タシットか、婆ちゃんの服と同じ白いロボットだもんな」

眼下の綺麗な髪をワシワシと撫で繰り返して他に面白そうな映画が無いか思い出す。変なモノでこの世界での映画は転生前の世界と遜色なく。世界の大半がヤバい事になつていてもネット配信で過去の名作まで揃い踏みなのだ。

不朽の名作から、ヤバい作品まで、具体的に言えばパッケージ詐欺してきたゾンビの後に二千何年とか書いてあつた作品。

流石にゾンビ好きでもアレは許容できない、パッケージに金と労力ガン振りしてるだ

ろアレ……。

さて、そろそろ婆ちゃんがやめると文句を言い出したので他の作品でも見るとしよう。ほのぼのなら季節も近いし、キーワード、クリスマス、大人対子供。これで決まりだろ。

「片手で良く打てるもんじゃ、慣れておるのか？」

「まあね。片腕無くして半年はこの状態で過ごしてたからそれなりには」

「それでペルシカが見かねて義手を創ったと、なるほどのう」

「ああ、聞いたんだ」

「ラボの中が寒いとは言え、ずっと長袖に片手手袋は目立つ。ワシも興味があったから聞いてみたのじゃ」

別に隠している事ではないから問題は無いのだが、ペルシカが話をしたという事に少しだけ驚いた。実際問題、俺より片腕の事で責任を感じているからな。

聞かれて話せるぐらいには整理がついたんだらうな。それならそれでいい。視線を上げて時計を一瞥する、もう夕方か……。何か摘まめる物、あったかな。

大人撃退コメデイのローディングが始まったので首だけ動かして部屋を見渡すも、見つかったのは飴玉袋、この際口に入れば何でもいいか、婆ちゃんこの飴好きだし。

手が届く範囲にあった袋を引き寄せて適当に二つ中から取り出して婆ちゃんに先に

差し出した、袋の色は紫と黄色、グレープとレモン味だ。

「ん？ 飴玉か？」

「そう、好きな方あげる」

「おお、ありがとう。……………スクラッチはどうやって食べるんじや？」

「……………あー……………」

義手生活で忘れていた、ご丁寧に包装された飴玉の袋は片手で開けるのは至難の業だ。考えなしだった故に言葉が出ない、仕方ない後で食べるでしょう。

「まったく、ほれ、あーん」

「……………婆ちゃん？」

小さくため息を吐いて婆ちゃんは袋から飴玉を取り出すと一言、あーん、と俺に向けて飴玉を口元に寄せてきた。予想外の行動に固まりながらどうしたもんかと困る。

いや、転生しててもこんな事小さい頃に家族にやられる位で女の子にやられる機会なかったし、そもそもこの絵面色々とヤバくないですかね。

「はよう、溶けるじやろ」

「あ、あー……………」

さつさとしろと急かされるも、困惑気味な自分に鞭打って口を開ける。まあ、別に誰も見ていないし大丈夫だろ——

「——スクラッチ、新しい腕……………何やってんの？」
何か最近、ついてない気がする。

「はい、あーん」

「……………ペルシカ？」

「あーん」

「いや、これくらいなら」

「あーん」

「……………ペル「あーん」」

もう何年の付き合いになるか、一定期間離れていたとは言えもう数十年來の仲だったペルシカがこんな風に構ってくるとは思いもしなかった。

膝に乗せてナガン婆ちゃんに『あーん』されている現場を見られて30分、地雷を踏み抜いたと言わんばかりの表情で、俺の隣で我関せずと映画を見ながら笑っている婆

ちゃんを余所にどっから持ってきたのかポップコーンを口に寄せてくるペルシカ。

何時もよりも圧がかなり強い、ジトツとしていながらも探究心に心躍らせて光っていた瞳も暗い、アレ、マジでヤバいんじゃないか。

ゴリ押しされたポップコーンを口を開けて受け入れる、二粒ほど放り込まれ先ほど既に婆ちゃんにもらった飴玉と共に咀嚼、何ともミスマツチだった。

構う側だった俺からすると何ともむず痒い、いつも以上に猫の様な感じで寄り添ってくるペルシカ。観念した俺に満足したのかニンマリと笑みを浮かべて映画を見始めた彼女の様子にホツとした手前、自惚れだが珍しくペルシカが嫉妬してくれたのかと勘ぐる。

まあそうだったら良いな位の希望的観測だが。

「ねえ、次の腕はどんなのが良い？」

徐に映画を見ながらそんな事を口にした彼女に俺はどう答えるか迷う。正直な所ペルシカに要望を伝えれば作れない物はそうそうないだろう。だがあまり高望みして負担を掛けるわけにもいかないし。

うーん、ああでも片手間で作れるのなら作ってほしい義手はあったりするな。

「……ペルシカは漫画とかゲームは興味なかったよな」

「手に取ってみろって言うなら良いけど………?」

まあ予想通り興味ないのだろう、言葉尻が徐々に小さくなったし先ほどまでご機嫌に動いていた耳が垂れ始めた。

ペルシカに人形以外の事をどうこう言うのは良くない、何より拗ねられたら嫌なので案だけ提示して出来るか聞いてみるか。

「いや、大丈夫。例えば肘から先を巨大なチェーンソーにするとか出来る?」

「……??? 出来ない事は無いけど、樵きりにでもなるつもり?」

「いや、聞いてみただけ。何処まで創れるのかなって」

「一回使ったらその瞬間にぶっ壊れるけど相手は死ぬ、って頭悪い武器とか創れる」

「それ何とは言わないけど、創れるんだ……」

「そういや『敗北者じゃけえ』とかネタ振ってくる時点でコイツ何だかんだそういう類を知っているのか……」

興味ないって口にするだけで意外と……。

「……………面白そうなアイデア、ありそうね。聞かせて」

ニンマリと薄い笑みを浮かべたペルシカ、どうせお前の頭の中にあるんだろう? なんて言えるはずもなく一度見た事があるロボットアームや前世で見ていたアニメの
中の義手。

そして自分の中で溜め好んでいた中二病の塊のようなアイデアを並べて行った。

「ダイヤモンド加工の爪が付いた義手」

「熊かしら？ でもそれ日常生活大変ね」

「ロケットパンチとか」

「うーん、飛ばす事は出来てもオートで戻って来るのは難しい……。作っても良いけど一回切りの消耗品になるわよ？」

「蛇腹みたいに伸びる腕」

「出来ない事は無いけれどその分重量がね……。簡単に壊れてもいいなら軽く出来るわ」
「鉤爪とか面白そうじゃの〜」

「フ○ク船長はイヤだな婆ちゃん」

「砂のワニかもね……。でも君は海賊ってタイプじゃないから合わないね」

「それじゃ電気を流せるスタンガンのな」

「自分も感電するんじゃないの？」

「……………対人にも使えるし、鉄血にも効果は期待できる……。良いわね。でもそれなりに手間がかかるから今はスペアで我慢してね」

「……別に無理に創らなくても良いぞ」

「良いの、息抜きぐらい好きにさせて」

「……、ありがとうperlシカリア」

「どういたしまして、スクラッチ」

「……」

「熱ツついのお!! この部屋は!!」

今更だが俺の評価は周囲の過大評価と言っても過言ではない。オッサンの下に居た

時の実力なんか隊の中で下から数えた方が早い位だ。

そんな俺がペルシカの護衛をやっているのも縁なだけで片腕を無くしてすぐに退役し、数か月人知れずのんびり過ごしていた所を何処から聞きつけたか彼女に連絡を貰いこの立場になった。

前の生活も気に入ってたが今も嫌いでない、自堕落な生活を続けている事に変わりないけれど人と関わるといふ点は独り身には凄くしみるモノだ。

コミュニケーションを取るのと取らないのでは大きな差がある。この世界に生を受けてもう数十年となるが肉親も居なければ友人は大体が戦死か行方不明。関わりを持てるだけで幸せだ。

ならグリフィンに所属すれば良いのでは、なんて考えも浮かぶが目に見えてブラック企業なのは間違いない。あの優秀なヘリアンでさえ碌に休日を取れずに生き遅れになっっているのだから。

俺が就職すれば間違はなくあそこから抜け出せずに人生終わる、断言してやる。

あれ、これ、かなり自虐になっているのでは？

いやまあ、周囲の俺に対する評価が高すぎる云々の話だったし間違っではないか。うん……そうだな……

しかししてなぜ急にそんな話になったかと言えば、俺の目の前でやんややんやと何かよ

く分からない理由で騒ぐ四人組の部隊のせいだった

「おじさくん、久しぶり〜!!」

「久しぶりだなスクラッチ、元気にしていたか?」

「……その様子だと先ほどまで寝てましたね、貴方」

「お、お久しぶりです……」

アンチレイン

A R 小隊、16Lab製の特別仕様の戦術人形達で編成された小隊である、上から。

A R 小隊きつての色んな意味でヤバイ娘、M4 SOP II

とりあえず酒と妹と一緒にしておけば大丈夫な姉御肌 M16

何か幸薄そうな雰囲気漏れてる委員長タイプ A R 15

M16の妹、部隊のリーダーで、スイッチが切り替わると凄い娘 M4A1

朝起きて、欠伸を掻きながらコーヒー飲みたさに部屋を出た先で偶然にもラボを訪れていた彼女達に鉢合わせたのが現在である。

肝心のペルシカは何時ものデスクの上でマイペースに何やら作業を進めており、彼女たちは待ちぼうけの様だった。

16Lab特別仕様の彼女達は他の戦術人形とは違い、指揮官の指示を受けずに単独で任務を遂行可能な高性能モデルといった存在だが。

他の人形達はメンタルモデル、人間で言う人格や記憶の類をデータに置き換えバック

アップが保存されている為、身体が破壊されてもバックアップがある限り別の身体で復活できる。

しかし彼女達とはある理由からバックアップを取る事が出来ない、それ故に戦力と特性から貴重な存在として扱われており定期的にペルシカが呼び戻してメンテナンス等を施している。

因みにペルシカのお気に入りという事もあつてまああの頻度で顔を出す。そうなると自然と俺との接点も増えるわけで、自然と軽口を叩けるぐらいには仲が良かった。さつさとこの場を離れば良かったものの、久方ぶりの再開に心躍らせたのが間違いだった。

何の事も無しに世間話をして早々に俺の周りをグルグル回っていたSOPちゃんが左腕に触つて一言、口にする。

「あれ？ おじさんの腕どうしたの？ 何時ものと違う〜」

「よく分かったな。ついこの間壊れてさ、今ペルシカに新しいの創ってもらってるんだよ」

「ほう、古くなったでも動かなくなつたでも無く、壊れた、な。珍しいじゃないか。何があつたんだよ」

何気ない一言から何を嗅ぎ付けたのか意地の悪い笑みを浮かべるM16に俺は苦笑

いが浮かぶ、いやまあ抜け目ない性格だし勤が良いから仕方ないがどう言い訳するか。

「あー、少し前にそっちの仕事を個別で請け負ってたんだよ。その時の任務で壊された、ブランクってデカいよな」

「仕事……？ 貴方が一人で、ですか？」

「そうだよ、何分ともう一緒にする相手は行方不明か隠居してるからね」

「……………もしかして」

AR15が訝し気な視線を向けて来るので嘘ついてないよと、苦笑いを返してやる。内心困ったな、何て思いながらその隣で何やら呟いたM4の方に顔を向ける。

するとあからさまに目つきが変わった。何かに勘付いたように弱気な瞳がこちらに向いて、心当たりがあるのか俺の事を観察するように眺めている。

オイヤメロ、戦術人形だろうが関係ない。可愛い女の子に見つめられるのは俺に効く、いろんな方面で。

「何だM4、何か勘付いたか？」

「はい、…………スクラッチさん」

「ど、どうかした？」

「この前、私達の部隊が交戦した鉄血の中に一人、異質なハイエンド機が居ま——」「ごめん腹イタイ」スクラッチさん!」

「オイ待てスク……SOP、ゴー
おじさああああああああん
!!!!!!」

……

……

……

ギヤアーツ!?!>

「ありやアイツがちよつかい出した奴だったんだな」

「なるほどね、だから『クソ野郎、傷アリ』云々喚いてたのね。納得したわ」

「アレの相手大変だったんだからあ……」

「そう言うなM4、結果的には比較的弱った奴を私達が貰ったんだ。感謝せずとも流してやろう」

「実際、元軍人が単身でハイエンド機を相手に大破ないし中破位の傷を残したのだから。人間ならボーナス貰ってもいいくらいよ」

「……うん、質問攻めで我慢する」

「それでも攻めるのな」

数分の後に、スクラッチは両腕をSOPの肩に担がれる形で引き摺られて来たという。